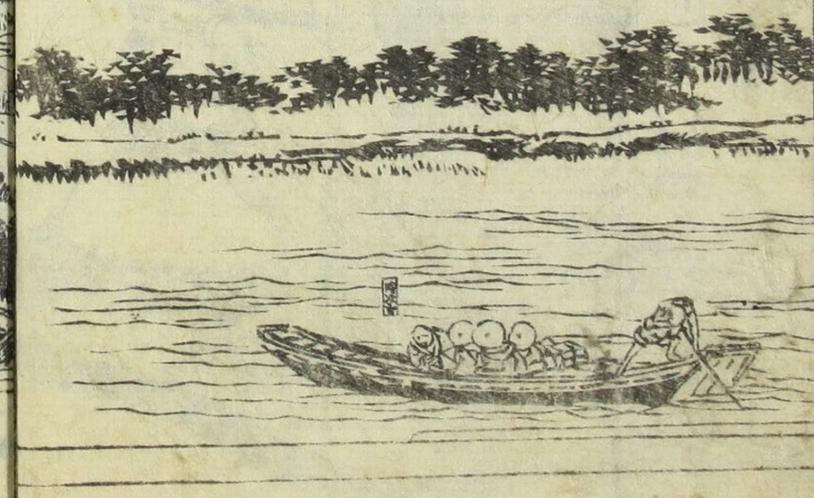
明烏後正夢三編 上

へ13
2909
10

門へ13
2909
巻 10
昭和九年
二月二日
購

英泉画

山崎屋文三



花育清
香月
ろく
浦里の新造
浦瀬
神崎の下部
繪戸平
春月屋の手代
儀七

□ 勧善懲悪世物語 五冊 豊亭馬琴作 溪齋英泉画 再板

□ 増補只八丁初編 二冊 春川五七画作

□ 同二編浮世長家 二冊 龍亭鯉丈作 溪齋英泉画

□ 人心視からくり 全三冊 式亭三馬著 歌川国直画

□ 貞操小笹雪 全三冊 梅暮里谷峨作 東居北高画

□ 小笹雪第二編 幽賞雲間月 晋米齋丸龍作 溪齋英泉画

□ 明烏後正夢 初編三冊 楚満人合作 鯉丈

□ 同 二編 全三冊 同作

□ 小松賢将仁行録 五冊 南窓楚満人合作 瀬川如皐 近刊

青林堂

浦里時次郎 明烏後正夢 巻之七

南仙笑楚満人
江戸　瀧亭鯉丈　合作

かぜいろを問人あぶ朝夕の露とおくれぬ花さくら
いつからうろいて冬枯ちる秋の野に咲れ落の穂ばかまで
今邪ハそぶまつくめ思ふ心ばせくや新この意恋ハうるさくね
憂ことも浮世の義理ゆ金所くちく。法ね新ちるムすきの
胸を晴ふむ人間園屋のさとちく。ゆ所ゆ

此所に来る人ハ。彼時次郎が実父春日屋甚兵衛なり。
我行方ゆ先歩し。同ド年齢ゆ老人と。跡より追付
由兵衛ハ コリ〳〵 辛ホ ろぐろ ぐぐ ろ ぐ ぐ ハ
ごぶぶ ぬ ト き ぬ ぬ 正 ヤ ア 由 ろ ぐ ハ
ホ孫ゆ所でも見ハかくまつ。今度ハ陸地とおもと
ろ人ゆ式唐時辺ハ何風間で 廿 アイヤ成程ハ変も船
でこ ぬ ぐ ぐ。彼ニ月八月ゆ春ら昔かゆ船ハのゆ ぐ 時ゆ ぐ。
難風でもあつてハと。老妻ゆ世継ゆも安ゆ

成田さまの人も来給ふべしとの事。是を聞つゝ昼夜行脚所々
ぶらぶらと参詣。早く成就願ひ引開元で入道いたし
人々は迷ひ信者といふものを降参さるゝ。尋ね合と岩
て山ハ〳〵それくさぐでお出ましあらふまづ〳〵どの〳〵出家あつて。
油うりとお尋ねされば往る山ハ〳〵イヤさてさてびきも
いるさるの人御出なるまつハまつこの方へ山ハヤ〳〵ハイヤ何で
ござるきそも〳〵この迎接の法師さまハとうとけれ利
益もあり。隣の女人成仏の御祈願とあることゝ〳〵ごぞイドの

とうお願ひも祈業の往生。せめて八幡世成助て幸
久々人間草迎へ用るもあるべ法のでちぐとでもも
ござるゞ。来給いそとゝぞんじて。イヤ何のも来て。お願
ぐ〳〵容赦きて。一度日八食事もそろ〳〵時
まいる拍子。あの分でハどゝ山ら。永坐拍子とられまし
山ハそれかまゞ耳恍るさく来て あんどいてまと。鳴
味噌〳〵其也厄介ものの毒イヤまゞあの
来屋で一ぷくたべまるやう。ハ隠り路をゞや。

「成程さうゐいてまちあるとあぐる所でもあの色け同士。
互の胸に一物と堤の菓子が腰掛。ちがゝとそこそ体ら
ひね「イヤ山王さまも春さ来八弥生の新集ゝぬとが。今ハ
もやゝ寒もちらほらこゝ。ちう〳〵霜枯の景色もまた。閑
清でゞすいねでゞすねら「うるわゞ〳〵。ちがこのうそ
ぶ〳〵野辺と景色とうゐ。「当地の流のこと。こら〳〵
どゝいつの。この隅田川八。何も去ら田舎あゆも。

さまとぶ蒲ゐうゐまとる「いっさゐ。此川ゝ船の方も
浦ゝ〳〵ちうとのるまゝアレ見るが沢山ゐまま
とる其中に。郡名といのがみそうちるが。それがどゝま
やらこらら中一句ちうふぬるちやがとゞく山川に
住ちばゐもとゝかのあでもえでゞ。船ちるゞやげる。イヤ
そゝまに法いてこらゞ一句結〳〵まゞゞるテ。「ゐき
るゞあれに〳〵てゐけ船ゐ」サハ〳〵何よ〳〵ろ水ちと
いつめハ雑旅そろゐて。むつまゝいあでゞざるナ

くぐつ
屋敷

「イヤ〳〵。そりやあなたかぎりさうでもおざるまい。見たこそこんつね虫けらでも。釈子夫婦の情愛程深いものハ世界にまるまいテ。く是を思へバ世の中にハ。鳥獣ゆもひつさ

曲「月の〳〵といふこゝろ〳〵げるゆ。寂初の嘆わけ分まてく

かゝ。猶り森の国淋〳〵。漸々入まて淋敷ましで。

ひぐらのこゑまて哀さるといふ高今る月の〳〵推量して

くぐさまと「成程こりやゆむるゆ。さるまるげらこゝハ

仕合と。たゞわくの女房といふハ不立交今の老婆

屋内人夫婦つゝまの男ひハ初らぬど。推量にも哀れて有差まれ知りた。風ホこゝまひたとるゆもあまど昔時程がたつてこんるとサ。彼のえまに婿る相愛と

ゆら死ぬ離るりゆ。是沈もるるまど「イヤ〳〵それハ

ぬゝ笑ふ遠ハテ若い月そらゝりやうんで力ぎ落ふ

ぞ。離別ゝとられこゝ形り。又この女房も喜まも

のてるでハごぎらぬゝ。折々ハ乗るも嬉ふてこれ

ゆ「フムそふこのてこんまバ。まハ乗るのの居ぞのハ

格別のるつ他人と他人の合せ物うれど。釈あまかくを
夏打明けて咲く。童ふハ。夫婦の中是程深んあれ
度るまの。それをアノ云ふ法道具の拵に引らしの
のぐるいとハ。ちとこゝ云ふ遠ひまたまされも今の人ふう。
死よりこれるりや。さうるもうけまど。1の樽そも一ツ
えいあどるもるのもどて。借金のもちが多らに
くるまつて。身祝ひとるあ〜友。ムるうぶも死出
まるまどるのうふ少けバ。今ハそのおそるも

何処へ中ら死んでいるこゝ中ら。又多うちにくるまりさ
のもちも。誰中ら油てろく洗ッてゆりさそうあ
強に久くの流浪でうんぜうハ仕様であろう
アイヤ正右ろう後あどる所人見ろ家ハぞんがあ。
まるしてもふ始者の孫ち術很。金てくどされ。ヅ
何ら叔金て早い喜ハ。身ふが大夏でこゝト
かりひちぶるアこ〜が内も寡沢ぬぐ困りまり故
こハ〜イヤどで相意の婆アがあらぶを人り

見て角くくぐされ色角朝夕ゲフ不自由ク是モウ上
五人呆やも悪くく外うぐくくべ彼是物入もかゝる加奉
お賜も寡のうるりや内〳〵でさひのとトとろてもつねあるろ
「こまと国ふまどの。アノお賜ハらーゞ狼イヤサ早ちろゞ狼
人のうでぐろぐで。孫ふくころさが指ちるハもろうさのちう
冢ろくくも。一ッくん時波郎が書こうり。ちく又賜ろハ抗
かくちと拒る狼ゞやこうふう。ふ本でハ十。ふくこれ狐のこる
たくハ知ゞ。下先そ良お賜ハ十。我ゞ高家のるハかシ

もかまうゞ狐人那ゞのうちのも。ぐうぐで財波郎ゞ勇猛
免して黄さサ羽ふ首ゞあるもうこゞ。ふうさ元の機嫌
まづまをうゞうて居あるゞふびん加財波郎ゞ身ふ尻
くやさふるけうや。孫条さくやるみゆうくくろさ加。
狼と内〳〵い合連ふ のの女郎の身ふ。さらをと
汗身ちそこでふーゞりすぐどうやらと種々人と暫くを
ふて抱されゞ泣ふらゞ。まといやもち高屋万家
捺まうされてぐる方。ちふ波屋りゆうふつて長ふ

此方のひがごと矢張こるるの強欲なり。甚者もるに猶
の息子。ようもそひ切られさことだや。其身代が大すく
聞あさまりさハコロが賢きいまのと云ごナ。あんまり
親子の情の薄い人成。下をいつて吹せまをうまづ時
次郎が放婿に成ろうてうう。お腹が閉この悪心が教会。さひ
かさるうて家出をるる者ハ。地所屋敷組る人金ず武百ま
出来ゝコリや他人ばくでいるくるりや。望まれこのおやぞ。
其ゝ云て。彼の浦里と申ず者ら先祖ら相続
た大切る田地拾反六ヘセ拾二丁といるの。ふだるゝそ
せ孫。浪居料の内ヲ。質入ゝ所ゝ。ゝ人コ。米穀の見ら
ハさゝでばゝゝうゝん（ますうの。おりや又子が可愛ハ
ふが。其ゝて添せさ財次郎が事でさ人。身ゝの曲ゝハ
ゝるゝねゝ。現立ゝ人の子が女郎を連て逃さゝそ。ゝるゝナ
尻とぬぐゝが魔さて。うゝさゝく勘當。ゝうゝのゝう
ちゝ。盗人ゝ追掛の者ゝ。連ゝ。ゝかるゝまゝと云ゝ
お腹ゝ人ゝゝゝゝゝゝて二百ゝと元の夫婦にて。種兵

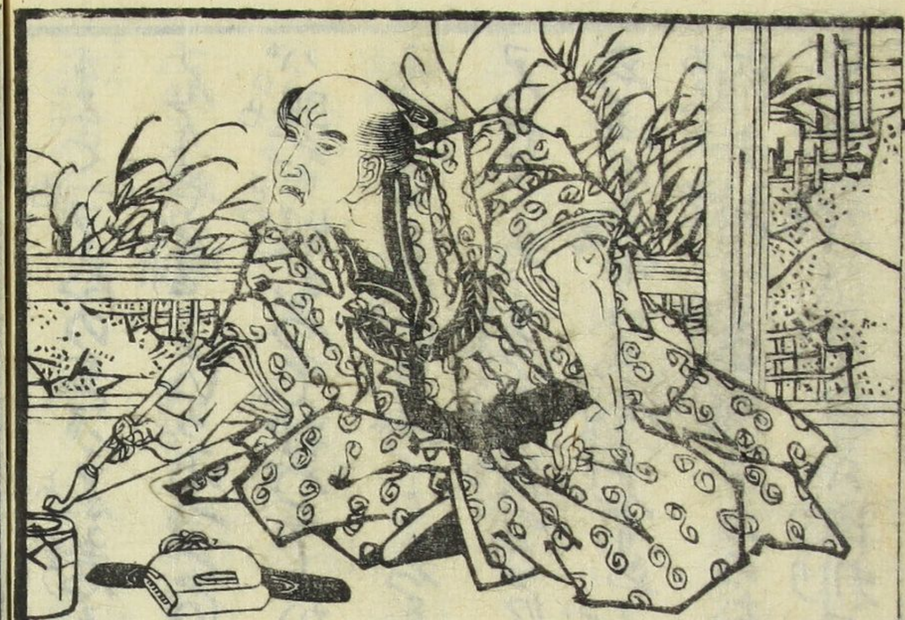
たあの新で。笑笑のと。一目ふく殺〜さま。あまと後
ちさう時次郎がよで。未後の水とのませさら。未来の
迷も。がしくうきろろうとろくてのる。ちりや死で仕義
娘でさく金をくまてくくろうえくもろやせねのふぴんく
侍者で死ふ水も笑ふとくく猫の墓をと金づくで捨
さろちやるが。いやサ二本や三本半くさて。分胴の下る
分ちぎやるろまんてそれ孤金がほ〜いのくまをど
金。昔からつ死合ぐそれわどの別欲人ともろうえ

ぐぐてのく孫もいふまん無蓋る袁ぐや。ちろ今近新色
へも出さるる。ろう云ま。ちろちろくくハ以未ハ美絵見ちら
恋にる鳴を連てく立ふ。ちく。くくこれ死ぐさわる
とて。ぐ。ぐくまろのろ。紙束ぐく。ぐや。家ろ〜今の一云
聞たりや。春日屋の家く半日も五てくハいやぐや
呑ける畑まの煙も腹の雲ろのてで灰吹く由
ちろちろる畑茶筒突つめてくそくくろ
今の根にいろもわんの産奥イヤく産奥も品ろ
まくハのくるんといるれてる取あるね。見ろうとろりや

ちるるものゝからるゝこと。離縁状取て行くのゝ。途中のゝ。
俱よりゝ入用るりや其内取るゝよへこいやとゝもいるこれまい。
アヽまゝ〜去り状ゝ入用るりや目出さいゝとてもトいさてゝ
エヽ孫も彼もなまゝ間果ゝや。今日こそいやあハこゝなね。
貴縄をつけてゝるゝ。引て行くト立出れバ。茶やの老婆も茶あ毒ゝ
ゝるを取ゝるとゝゝゝ

ぞかへて家へ入ヨリ、ぜひ、そうであろう。ものまれ〳〵。
家へこいひにいろ。コリヤイ。家中〳〵其用ぐ一生の別れ
ぶやと。おりや心底ひきろうまでと。明日のたつか
ぞこいぶ〳〵入ぐ立もうさう。ろうさぐ今又ものまぐ
新久〳〵ぶりでこんさりや。又腹ぐろて〳〵。さ酒ぐ出て。
モ。おぐいねろ人おぐ一ヤのふ腹くこの不相いまさら
ふ色どかへろねふ孝おぐ泥中云まもござりませね。
出ろぞろ。ところやろるお新とこんまりて。おろまとうござろ

まと曲ヨ。おのまぐ不孝ろるまるまいも。親の陸ろるまを
へりや。嘻〳〵いろ。ゆろこのやろぐ。先達百中時と性
バ眼を炬ろて。むづ〳〵かろこそのろぐ。そりやそのろ
そうろのい。いろづと云まろこ狐の罪ぐや。よい世界の
人世〳〵ろ。多分目ろたるまろぐ。この三保ぐやと
ろろて居ぐ。今こんりや金快の相ぐ。まろ〳〵見ハ
荒井村の茶屋さるのろぐ。ものまぐ相ろまま孝のめ
ゆも。お彩ひのふぜび出利益のあろこいやもこんろ狐の



意地。イヤ仏の意地ぢやハ。
と今にちがわぬ出利ぼうの
雑い奴。こりゃ預機ハ
せわぞ。ちふ。あまぶ。ゆつくれ
ゆんぬ。ちて。アどの面さげて
ちまぶ。義へ。今貝ちれば
方ちら。来て。ゆうーく
ゆるぶ。次来ちまぶ。眼に機と

ゆうさわぞ。ほのぶ。ちふ。ちもく
育ちつて。今ぞハ此所茅家
の住居。心ぐらとハいうがら。
朝夕の煙りもたなぐの様子
さりや己が罪己と考へのじや。
心労ちちゃうんくて其ハア頬
骨がとつて目の大きうろつき
変ハいぞさけうこいやつぞや。

おもやモウホウ〻〻て、片時もとりやせぬこゝろ。ばゝや勘
當してうゝ彼是三年程ぞ。ゝて只管てゝのまつさら来れ
うるまやぶのようるものゝ。金蔵ハ土蔵ゝら涌めのと心得て
居おつさ対今こそ呂ひ當りおつさでおらう。それに引久
おもハナ。不人情なおのまと大切ぐつて。勘当の氣病が
重りて。死ね斗りの大病。下かゝるゝらぬ重縁の孤。そまに
其後家こそさ付て。おのまぐ死ぬでもおさるゝ。あてまり
時哀れる迄ての大どゝ。別へ外の女よ心とうつ。真実なる女

房を撰かんゝまつよい心いた。おりや狐の者でさんあるそ
ぶつこそ。ふらうそ。おのまぐゆくい狐アつお昭分可能申の
て。おさうけるゝて。不便でゝ。こゝらぬゝ。イヤめゝ百万いゝ
ても役にこそね。ゞゞ今日あまぐ来ハ。ちこ抱さい支が
あつてだやぐ。親と知こも呂ゝこね根生ゝら只ゝ中ハ人ある
まいす一見ハまつさ勿論ゝ。こそハ身よ及ぶぬるゝりと。
今の限り今まで不孝のお詫ゆも「仮支成とそも」
うねだやナ「時」ぐゝいて〻まつて「曲」そ義知ゝるゝりや先生

姫ごぜや。外でもろうのがどのでお照と。女房ふまうてゆうて
くまろよ「立てあのおてるを」「ヲくサいやう」「イヤ〳〵」「勝心たろう
「とくさんの浜でバござりませねば。まく不物るこさら〳〵
あのそもつたまご。源物とこくして長まる。人お照。うんこぐ
雪乳」とゆませう。去るぐら人。今こそ女房ともお照こさ。時
捨ゆもされぬ仕合深に今でバことけあつて。お星ゆも新れ
てゆもめの刀。物ふ思代の拾よ思られあんまりこつちの縁
多ヰ「由」「サて真獨身が世方の仮。今こまぶいの人情の

下至り。當り前のこの。我が猪くゆの人情を聞人変
小人情こそ。そりや至ってねく。さて拾もこの。おのを
邪見こるおのまでやのの。なこと〳〵いうまたれさせまだこそ。
二人揃つて居る所。アノ内場ちお照を浚さまうぴふぬ
儀理ごそいうぐこも。動ふ〳〵て。女房よりてゆつてこれまを。
いのふあのつが可愛このでぬ。ぬらまうてぬふも形のも
おこ〳〵らまてこのんぬやこのこ。あまぐこいく出ごと。我
ふれるみぐがあてトふの野ゆそまに又いとこの人家衣

妙見さま。釈さまこゝん倶ゝ已まで。孫といふ物ばかの物
ゆもかあいくのめゝ。動出してかゝゝ力を蔵さまゝ川て。
あまこ孤の佛いびくも。月よ一千歳の寿年りさ（さい）
ちゆゝ。明ても言ても。ちのまびこと斗りまつりさも
いゝ出さのびた。雨が降ふゝ。イヤ降ふ着て。年こ孤
を引出ろう。ゝ。まこ人斗の孫とゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
といふ。あまこが孤るいんびるるのゝ。ゝ長生海生
のさまゝびゝ。ぶゝ。ゝ早くゝ死よさいゝ。ゝモウ蔵のゝ

おゝゝ。ゝいんびるぶそ。ぶゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ動出して
孤よ孤ゝまそ。ゝんの中でも。ゝの毒ゝ。たまゝゝぬ
ゝ人ゝりゝ。ゝ新が大切ゝ。百年も二百年も。ゝで
新ゝこゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

くとろのもぷ。ちろ。おのまぐ可笑さ。甚だハナ
手業ろ。ちろ。おあづろの菅公の一油。是ともお預と。
ろ。ぷハ。ろまと。ハ。ろまと。ぬ。ぬ。ハ。ぬ。ハ。ぬ。ハ

船の首人縄の付くなり。そまをこえまつぬ孫の已でもえ
るくちりや紙和ていまで。内ら火を生ると全ちり。時に
郎が特出ーさいて解。社を特にいるに拒よりつ
煙ーいそぶりとで。和つく点の彩朋。はぬに外と寄さを
て。陰義のよ筋を引出そのと。貝を付て長るきうちに。
ちん対と出ん儀七まで。懐場と百姓明ケて立命。めつ
ちやくつさの手で。お驚び寇家九死一生。其きつ
さん取落て。今八のそるとふ場が自害。イやの春日

屋の引戸開かれぬ。そりやあそこらの下人共なり。
若ゆうの人已ぐる。風体の人に紛れて今ゆも来
家ら。取方のこの人必ずきもつのつみをいひくすで。
其戸ひげとる 睦ぐ。法ぐくこの方やるらこん。サそそを
除く逃げたるの。おやとらえて来へり来へうて
くま。今まで一刻も早く。一油の塗義仕甲て。動出
ゆうく。此人陽者どのとお思ゆ内こ打明て来さ
うまで。此見まるこ物へ嘆き。荒川様の仰せ。明日

追ひ来一油を持参せ。さまるくく順後見ろくく代
の金。方人右の塗義ヤ分ん。義角ゆ拭のあづら成ヤ米
いまも。其方老裏方とんて。さまとまで當家大切の
市用向もおづつろう。将又紛失の一油も。悉財産郎
持参ねせ。由。親子の先より引き。塗義も申ゆかと
こんるる人。此方ゆて百捕義度塗義いまで。出家
へ筋目中に春日屋人格別の仕懐とのつて。此
外の油にちづづ。其方人熟居ヤ分るとの。

夏金ぴの紋の荒川張。ろうたうまるつる目や丸と。紋
下ハ有れど法子と地紙。又ま丸に八紙ゝ巻まきあるう
ちまでも。ふ使ふ人お照あぶるいめハこの張紙一ト巻
を引拂ゝ。張ったちまだらく弟を思ひ。おてるにそゝて
やつてこれ一附有がるこれ。お兼の女房のおこと。そもゝ紙ままでハ
ごぎりませんが。張ったふ拂のことさら。今更ちうれふ
お目よかるも一油イヤ〳〵そりゃ大ちがう。今日よいわれ
こゝろぐりて。ちうぐの紙ぬて。こぎて張たりうあるる

拂よりさりゃ。ア。ちうの人ぬまつ。ふるうて。今
ゝ。お照を連まて。ちうぬ帰ることいって。内へいられゝ。
那ったん傳。今ハさをめんちゝく元ゆであるゝ。金ぴ
ゝ。ぬ丸まゝの。ぬ張ると。ぬ張たりのりぬ
工面。ちうの張ハ紙で。ぬ一ういてゝ。ぬ。羽三百
ゝ。ぬを引ちうてくまろ。ドレ。硯箱と。ト懐の紙
取出。ちうへの形の状。ぬハ流よこんぬまでも。
まんハ法ぬ夜の。ぬ迷ハ心ゝ。ぬの歩も

涙も先。呉て類む降る。かくもぐも清夜のひさ
さら形と重云の。かくさるる獨の忍恋。不具も以
て薄云ます。さらに止ぬ尽きりける。

明和五年三月上

明和五年三月上

明鳥後正夢三編上終

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明為後正公[illegible]

[illegible]

[illegible]